様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３１８５

研究課題名（和文）幼児期から児童期における嘲笑理解の発達を踏まえた道徳教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Moral education program based on the development of the understanding of ridicule from early to middle childhood

研究代表者
伊藤　理絵（Ito, Rie）

常葉大学・保育学部・講師

研究者番号：７０７８０５６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：他者を傷つける笑いについて、子ども自身が共感性をもって相手の感情について考え、議論することがいじめ防止教育になると考え、嘲笑理解の発達を踏まえた道徳教育について検討することにした。嘲笑理解と規範意識・道徳性の発達の関連を明らかにし、笑いに纏わる様々な事例から、考え、議論する指導法を検討した。
6歳までは故意性の判断に揺れが見られていたことから、「うれし泣き」のような、“典型”とされる表情と感情の不一致場面に着目し、その表情が意味する感情について考え、議論する道徳教育を提案した。また、“いじめの芽”に対応する協働的保育と子どもの逸脱行為や対人葛藤場面への脱慣習的関わりを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
嘲笑理解を含め、子どもの発達を踏まえた道徳教育について考えるにあたり、課題の通過率等で子どもを評価した結果に基づく型にはめたプログラムは、望ましくないことが示唆された。「笑い」という、一見、ポジティブに思える感情を表しているかのように思われる表情や、相手からの謝罪を笑って許せないネガティブな感情についても、表出の意図や受け手の心的状態について対話的に考え、議論することが重要であることを提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine moral education based on the development of understanding of ridicule for anti-bullying education through thinking about and discussing the feelings of others with empathy including laughter that hurts others. The relationship between the development of understanding of ridicule and morality was examined, and teaching methods for thinking and discussing based on various examples involving laughter were developed.
Since there were some fluctuations in judgments of intentionality until the age of 6, the situations of discrepancy between facial expressions and emotions were focused on, such as "crying with happiness". I proposed a moral education method that encourages students to think about and discuss the emotions that the facial expressions imply. In addition, cooperative and post-conventional intervention were considered.

研究分野：子ども学，発達心理学，保育学

キーワード：嘲笑理解　道徳教育　高度な心の理論　笑いの攻撃性　他者感情理解　道徳性　意図

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

情報化社会で発生する今日的ないじめである「ネットいじめ」は、周りからいじめだと気づかれないように巧妙に偽装･隠蔽するため、ますます大人や教師から「見えにくく」なっている（原，2011）。ネットという大人からは見えない子どもの社会においても、子どもたち自身が自らの判断でいじめのない世界を創り出す力を培うことが、現代社会の道徳教育には求められていると言える。しかし、道徳教育の現状は、いじめに向き合う力を培う「考え、議論する道徳」への転換が訴えられているものの、そのための教材の開発が十分になされていない（藤川，2017）。現在の道徳教育は、従来とは異なる授業を実践する必要性に迫られているのである。

児童期の教育においては、いじめ対策として身体的攻撃のような目に見える直接的攻撃の予防や防止に大きな注意を払っていることが、結果として、大人からは見えにくい攻撃行動を肯定しやすい状況を作り出しているという指摘がある（Werner & Hill，2010）。幼児期であっても、他者との関係性を嘲笑のような笑いによって絶つ攻撃行動は、大人の目から見えにくい状況で発生する（伊藤，2012）。

したがって、子ども自身が大人の目がなくとも「このような笑いをすると、相手が傷つく」ということに自覚的になり、他者への共感性をもって相手の感情について考え、議論することがいじめ防止教育になると考え、嘲笑理解の発達を踏まえた道徳教育について検討することにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、嘲笑理解と規範意識・道徳性の発達の関連を明らかにし、幼児教育と小学校教育の連続性をもった「考え、議論する」道徳教育プログラムを開発することである。

幼少期に冷やかしや嘲りの対象となった経験を繰り返すと、社会的なやりとりの中で生じるあらゆる種類の笑いを楽しむことが困難になる場合がある（Martin，2007/2011）。しかし、子どもの社会的発達における嘲りの役割については、これまで提唱された笑いの理論では焦点が当てられてこなかった（Billig，2005/2011）。

「笑い」の表情は、“楽しい”“嬉しい”“おもしろい”というポジティブ感情をいつも表しているわけではなく、相手が笑っているからと言って、自分は笑えないということもある。また、顔は笑っていても心は泣いていることもある。自分自身が笑われて嫌だった経験など、「笑い」が喜びだけに帰属できない事例を取り上げることで、笑いに纏わる様々な経験を振り返り、感情のすれ違いについて考え、議論する指導法を検討する。

３．研究の方法

所属機関の変更と COVID-19 の影響により、当初予定していたフィールドでの研究や対面での実験等が困難になったものの、以下の方法で嘲笑理解の発達を踏まえた道徳教育について検討した。

(1) 嘲笑理解の発達と表情について語る道徳教育

幼児期後期から児童期（小学１年生と小学５年生）に実施した感情理解課題、心の理論課題、笑いの攻撃性理解課題（麦茶課題・転倒課題）及び笑いの攻撃性比較課題について（課題内容の詳細は、伊藤(2020)参照のこと）、再分析を行った。嘲笑理解の発達について検証し、小学１年生の複数の道徳科教科書に使用されている『二わのことり』を題材にした道徳教育を検討した。

(2) 協働的保育と脱慣習的関わりによる道徳教育

これまで蓄積してきた観察研究のデータと研究期間中に協力園から提供された動画の分析を行い、協働的保育と脱慣習的関わりによる道徳教育を検討した。なお、脱慣習的関わりによる道徳教育は、COVID-19 以前に協力園で感情理解課題、心の理論課題、攻撃性理解課題（麦茶課題・転倒課題）及び笑いの攻撃性比較課題を実施している期間中に、協力児が経験した事例から検討した。

４．研究成果

上述した研究方法から、以下の道徳教育の提案を行った。

(1) 嘲笑理解の発達と表情について語る道徳教育の提案

嘲笑理解には、感情理解、心の理論、道徳性の発達が関連していると考えられるが、幼児期後期から児童期にかけて、「わざとかどうか」という故意性の理解を併せて、他者の失敗を笑うことの善悪判断が行われる可能性が示唆された。特に、6 歳までは、故意性の回答に揺れが見られていた。小学１年生のクラスが主として 6 歳児と 7 歳児で構成されていることを考慮すると、同じストーリーで同じ表情を見せても、その意図の理解に見解の相違がある可能性が考えられる。

よって、幼児期と児童期の移行期の道徳教育として、「うれし泣き」のような、“典型”とされ

る表情と感情の不一致場面に着目し、その表情が意味する感情について考え、議論する道徳教育を提案した。その教材として「うれし涙」が表現されている『二わのことり』（作・久保喬）を取り上げ、表情と感情から、主体的・対話的で深い学びを行う道徳教育について検討した。

また、表情と感情の不一致という点では、いじられて笑っている子どもが、常に笑われたいわけではないことがあるように、顔が笑っているからといって、すなわち喜んでいるとは見なせないことがある。この点について、中学生が考えたいじり場面を題材にしたＥテレ『いじめをノックアウト』“いじり”から考える友だち関係」に携わり、盛り上がる笑いだけが人と仲良くなる笑いではないことを示唆する笑い（笑顔）の事例を提示した。

(2) 協働的保育と脱慣習的関わりによる道徳教育の提案

幼児期から児童期における道徳性と心の理解の研究を概観するとともに、保育者・教育者の関わりについて、協働的保育と脱慣習的関わりの観点から検討した。

協働的保育については、人を笑わせる行動（ユーモア行動）の多い一方で、仲間関係において攻撃対象となりやすい傾向がみられた年長児男児の事例を取り上げ、一方的に笑われやすい子どもを園全体で支える保育について考察した。仲間から「笑ってもいい子」と見なされている幼児であっても、常に笑われたいわけではない。このことを考慮し、いじめに発展していく可能性を捨てきれないと判断した園長の主導により、クラス担任と教職員が一体となって関わった事例から、幼児期にみられる“いじめの芽”に対応する協働的保育についてまとめた。

また、幼児期後期の嘲笑理解の発達には、語彙年齢、他者感情理解、高次の心の理論、および故意性の理解を含む道徳的判断が関連していることが示唆されたが、これらの要因の全てが満たされることで嘲笑理解がなされるとは言えない場合があるとして、年長児(Ｙ児)の泥団子のエピソードを検討した。嘲笑理解の発達も、多様な個人差とプロセスがあることと、その発達を促す保育者・教育者の関わりとして、脱慣習的関わりとしての道徳教育について論じた。

身近な大人（養育者・保育者・教育者等）は、しばしば、子どもの逸脱行為や対人葛藤場面の加害者に対して謝罪を求め、被害者が謝罪をした相手を許すことを促す関わりをする。しかし、このエピソードでは、年長児(Ｙ児)の大切にしていた泥団子に他児(Ｚ児)がぶつかり、壊れてしまった際、Ｙ児はＺ児の謝罪を受け入れられず、大人（園長）を仲介に、壊したのは故意か過失かに焦点を当て、Ｚ児の意図を繰り返し聞いていた。Ｙ児は、心の理論課題を通過せず、嘲笑場面に故意性を見出した他の幼児に比して、語彙年齢が低い傾向が見られていたため、嘲笑理解の発達という観点からは、心の理解が未熟であるために、不適切に笑いの攻撃性場面を解釈したとも受け取れる。しかし、Ｙ児が大事にしていた泥団子が壊れてしまった際、ぶつかったＺ児の意図を真剣に知ろうとする姿があった。両者の間に立って、互いの思いを伝え合う仲介役に徹する園長は、謝罪と許容で安易に解決しようとせず、お互いが「どうしたいか？」「どうしたらいいか？」を問う関わりをしており、約 20 分のやり取りの末、Ｙ児はＺ児を許す気持ちになれたのであった。

以上のことから、嘲笑理解の発達を踏まえた道徳教育については、型にはめたプログラムが望ましくないことが示唆される。「笑い」という、一見、ポジティブに思える感情を表しているかのように思われる表情や、相手からの謝罪を笑って許せないネガティブな感情についても、表出の意図や受け手の心的状態について対話的に考え、議論することが重要であると思われる。

＜文献＞

Billig, M. (2005)『Laughter and Ridicule: Towards a Social Critique of Humour』London: Sage.（鈴木聡志(訳)(2011)『笑いと嘲り ユーモアのダークサイド』 東京：新曜社.）

藤川大祐（2017）「道徳授業における二値的課題の扱いに関する批判的検討－「考え、議論する道徳」に資する 教材開発の構想－」『授業実践開発研究』10, pp.1-8.

原清治(2011)「ケータイの利用実態といじめの今日的特質」原清治・山内乾史(編著)『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』pp.1-23. 京都：ミネルヴァ書房.

伊藤理絵（2012)「幼児の笑いを考える―笑いの攻撃性の観点から」『チャイルド・サイエンス(子ども学)』8, pp.62-65.

伊藤理絵（2020)「幼児期後期の嘲笑理解の発達：感情理解・心の理論・道徳性の観点から」『笑い学研究』27, pp.19-37.

久保喬(1994)「二わのことり」『久保喬自選作品集 第三巻』みどりの会, pp.117-120.

Martin, R.A.(2007) 『*The psychology of humor: An integrative approach*』Burlington: Elsevier. （野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一(監訳)(2011)『ユーモア心理学ハンドブック』京都：北大路書房.）

Werner, N. E., & Hill, L.G.(2010). Individual and peer group normative beliefs about relational aggression. *Child Development,* 81(3), 826-836.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 伊藤 理絵	４．巻 27
２．論文標題 幼児期後期の嘲笑理解の発達：感情理解・心の理論・道徳性の観点から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 笑い学研究	６．最初と最後の頁 19～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18991/warai.27.0_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤 理絵	４．巻 163
２．論文標題 子どもの社会的笑いとユーモアの感情と発達－両面性から理解する	５．発行年 2020年
３．雑誌名 発達	６．最初と最後の頁 27～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤 理絵	４．巻 54
２．論文標題 幼児期の仲間関係におけるユーモア行動を育む協働的保育の一事例―笑われる子から笑わせる子へ―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学　研究紀要	６．最初と最後の頁 9～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤理絵	４．巻 53
２．論文標題 表情に着目し、感情について考え、議論する道徳教育：「二わのことり」を教材にして	５．発行年 2020年
３．雑誌名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 伊藤理絵	4．巻 52
2．論文標題 子どもの食事場面における笑い：道徳教育としての食育からの検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 古賀松香・松井愛奈・佐久間路子・伊藤理絵・深津さよこ・松原未季・内田千春	4．巻 2
2．論文標題 領域「人間関係」の専門的事項に関する調査研究レビュー	5．発行年 2022年
3．雑誌名 乳幼児教育・保育者養成研究	6．最初と最後の頁 2-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 伊藤理絵
2．発表標題 「笑ってはいけない」場面における規範意識と道徳性
3．学会等名 日本保育学会第73 回大会発表論文集(2020) J-D-8「笑いからの子ども理解と保育実践」（企画・話題提供者）
4．発表年 2020年

1．発表者名 伊藤理絵
2．発表標題 6-7歳児の嘲笑の意図理解と感情理解および心の理論との関連
3．学会等名 東北心理学会第73回大会自主企画シンポジウム「嘲笑と悲しみ」（企画・司会・話題提供）
4．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤理絵
２．発表標題 笑われる行動は、なぜ“見えにくい”のか？
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会ラウンドテーブル「子どもの笑いの測定と評価－“笑う・笑わせる・笑われる”の観点から見えてくる課題と可能性－」（企画・話題提供）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白井真理子・伊藤理絵
２．発表標題 失敗を笑われたことに伴う感情：痛み・恥・怒り・悲しみ
３．学会等名 日本笑い学会第25回総会・研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 伊藤理絵
２．発表標題 幼児期・児童期における笑われる不愉快さの理解と感情理解および心の理論との関連
３．学会等名 平成30年度保育教諭養成課程研究会研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤理絵
２．発表標題 企画趣旨「笑う・笑わせる・笑われる－発達的視点からの捉え直し－」
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会，ラウンドテーブル（企画）
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊藤理絵
２．発表標題 嘲笑と故意性の理解―受け入れられない「ごめんね」の事例から―
３．学会等名 日本笑い学会 第28回総会・研究発表会．2021年記念講演・シンポジウム・研究発表要旨集，p.4
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 岡崎女子短期大学幼児教育学科	４．発行年 2021年
２．出版社 みらい	５．総ページ数 120
３．書名 保育者養成校で学ぶ学生のための保育入門「第2部第1章 子どもの発達と理解」(pp.29-32，伊藤理絵)「第4部第2章3 生活と人間関係」(pp.83-86，伊藤理絵)	

１．著者名 佐久間 路子、福丸 由佳、丹羽 さがの、伊藤 理絵、江上 園子、大瀧 玲子、平井 美佳、大野 祥子、曽山 いづみ、大庭 正宏、野坂 祐子、小林 美由紀、民秋 言、小田 豊、杤尾 勲、無藤 隆、矢藤 誠慈郎	４．発行年 2021年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 160
３．書名 子ども家庭支援の心理学「第2章 学童期の発達」「メタ認知：自分と社会見つめる目」(pp.11-20，伊藤理絵)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Eテレ『いじめをノックアウト』「“いじり”から考える友だち関係」 https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005170691_00000

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関